

# 農業インターンシップ

三田真史

(みた まさふみ)

今年の春は長女のことがいとも気がかりだった。就職活動のためだ。

大学4年の長女は、この3月からほぼ毎日、リクルートスーツを着て大学や大阪市内で開かれる、さまざまな会社説明会に通った。4月から志望する中小企業の採用試験も始まった。ある企業の最終面接で落ちて泣いて帰り、ひどく落ち込んでいたこともある。それでも、働きたいと思う会社から内定をもらい、6月初めに何とか就活を終えた。親バカ

だが、内定書類に署名する時は自分のことのようにうれしかった。

そんな就活だが、すでに長女の翌年、2019年卒学生の就活戦線が始まっているという。そう、インターンシップ(就業体験)である。経団連がこのほど決めた19年入社者の就職活動に関する指針で、注目されるのは、インターンシップの充実策だ。これまでの指針で「5日以上」としていた縛りをなくし、1日だけの開催も認めた。これにより、

学業やアルバイトで忙しい学生も1日なら参加でき、幅広い企業の実情を知る機会が増える。一方で、企業側も、できるだけ多くの学生と接触できるメリットがあるだろう。

日本でインターンシップが本格的に始まって20年。あくまで教育の環境で、働く体験の場を提供するのが目的だ。インターンシップが始まる就活は学生にとって成長のチャンスでもある。さまざまな体験をし、志望先を絞り込んでほしいと願う。



このようなインターンシップを、宗門と龍谷大農学部が連携して昨年からは行っていることを知り、趣旨に賛同して協力することにした。「寺院インターンシップ」とされ、学生が寺に宿泊しながら地域の農業を体験する制度だ。寺院がある農村や過疎地に若者が関わることで、地域の

活性化につながる狙いもある。

今年、農学部ゼミと連携した取り組みのほか、期間が自由に設定できる宗派主催の「お寺de農業インターシップ」事業も行われた。京都市北部・与謝野町にある私の寺では、坊守が7月中旬の3～6日間の研修プログラムを作成。これを見て、2～3回生の男子3人、女子1人が3日間のプランに参加した。

その坊守が地域おこしに携わっていることもあり、町の農林課が全面協力してくれた。学生たちは初日、町が力を入れるクラフトビールのホップ収穫のほか、おからを用いた肥料を使う自然循環型農業、気温や水温、土壌などのさまざまなデータを管理して稲作に生かす町独自の試みについて農家や職員から学んだ。また、農家の門徒が栽培しているイチゴの苗作りや小豆の種まき、ブルーベリーの収穫作業なども2日間にわ

たって体験、一緒に汗を流した。

2日目の夜には、門徒の人たちと学生との交流会を催した。地元産の新鮮な野菜や魚などを食べながら農業の現状や課題、学生が志望する就職先などについて歓談した。



農学部の学生を受け入れて気づかされたことがある。当然と言えば当然だが、学生は他の一般の学生と同じく、卒業後は企業などへの就職を目指していることだ。農業には関心

があるが、農業そのものを生業にしようとは思っておらず、農業体験もほとんどが初めてだった。長期間のインターシップであれば心身ともに疲れ、辛い思いだけが残ったかもしれない。企業では1日だけの開催もあるように3日程度が参加しやすいのではないかと感じた。

学生たちの中には、大手の種苗

会社への就職を考えていたり、農業や食などで地域と都市を結ぶ仕事に携わりたいと話したりする3回生もいた。このため、クラフトビール造りなど町独自の農業政策や農家による多様な野菜、果物栽培について座学と実際の現場の両方で学べたことは意義深かったようだ。農作業の体験を軸にしながらも、地域の農業について概説的に知ることは重要で、行政の協力が得られればプログラムの内容も厚みを増す。

期間中、何よりもうれしかったのは、協力してくれた門徒や農家の人たちが学生との交流を喜んでくれたことだ。自分たちの農業や過疎化が進む町を少しでも知ってもらいたい、と繰り返し語っていた。町の主産業である農業を通じた交流はやはり地域を元気にする。来年も、学生を受け入れたいと思っている。

(京都新聞社文化部長・論説委員)